

ゾウ舎におけるゾウの死

【Death in the Elephant Stable】

http://www.upali.ch/death_en.html

ゾウは何歳まで生きるか？

ゾウの寿命は、0～50歳であり、非常に長く生きた場合で60歳くらいである。その高寿命にもかかわらず、実際のところは、ほんの一部のゾウだけが、50～60歳に達するだけである。

ヨーロッパでは、1980年以降、89頭のアジアゾウの子ゾウが生まれたが、15頭は死産であった。生きて生まれた74頭のうちの13頭は、生後直後に死亡し、6頭は、1歳までに死亡し、14頭も、その後に死亡した（訳者注：すなわち、無事に生まれた子ゾウのうちの45%が、早いうちに死亡している）。

なぜ、メスゾウは、自分の赤ちゃんゾウを攻撃するか？

若干の赤ちゃんゾウは、誕生直後に、不慣れな母ゾウに踏みつぶされて死亡している。赤ちゃんゾウを踏みつぶした母ゾウたちのほとんどは、出産（分娩）を経験したことがなかった。

こういう母ゾウたちは、経験したことのない陣痛と、敷きワラの中で、奇妙な臭い（血液や羊水による）を発している見覚えのない動物（＝自分の赤ちゃんゾウ）によって、パニックに陥る可能性がある。そのストレスによって、母ゾウは、見知らぬ者（自分の赤ちゃんゾウ）を攻撃し、赤ちゃんゾウには致命的な結果となる。

こういった理由で、ゾウの飼育係たちが、母ゾウを落ち着かせる信望（影響力、なだめる力）を持っていて、かつ、ストレスのかかった母ゾウから赤ちゃんゾウを保護できることが非常に重要である（Free Contactの章を参照）。

ゾウたちにとって何が危険か？

健康なゾウたちであっても、ゾウ舎周囲に掘ってある深い堀（モート）に落ちるような事故、そして、ヘルペスウィルス感染、ゾウポックスウィルス感染（ゾウの天然痘）や結核のような病気で、あまりにあっけなく死亡する（Chains、Herpes、Smallpoxの章を参照）。

なぜ、「ゾウの飼育係のあなた」が、ゾウたちにとって危険因子になるのか？

もう一つの危険因子は、ゾウの飼育係に対するゾウの行動である。

動物園で生まれたゾウたちの中で、若干のゾウたちは、その動物園におけるゾウの群れの社会構造（階層社会）に順応できなかつたり、あるいは、自分の飼育係を攻撃して負傷させたり殺したりしたために、殺されている。

これらのゾウたちは、自分の飼育係の社会的順位を、ゾウの群れの中で第一位として喜んで受け入れる（服従する）気がなかった（Accidents と Training の章を参照）。自分の飼育係を攻撃することに成功したゾウは、飼育係が、攻撃にびくともしない強い生き物では全くもってない（人間があまりにもろい）ことを学び、飼育係が虚勢を張り続けて（嘘をつき続けて）いたことを知る。

また、サーカスと動物園における多くのオスゾウのマストは、飼育係とオスゾウの双方に致死的な結果を招いてきた。

マスト期になったサーカスのオスゾウは、もはや調教師が制御できる生き物ではなくなり、調教師を攻撃し、そして、攻撃したオスゾウは、その「凶暴性」のために殺されてきた（Musth の章を参照）。この有名な例は、ムルテンのゾウである（Murten elephant の章を参照）。

なぜ、これらの危険なゾウは、殺されるか？

動物園とサーカスには、そういう危険なゾウのための余分なスペースは、ほとんどない。動物園とサーカスでは、ゾウたちは、自分の飼育係たちと直接的に接触して（直接飼育によって）暮らしている。

危険なゾウも幸運に恵まれれば、メスゾウのZambiのように、防護下飼育機能（Protected contact の章を参照）のある動物園や公園に譲渡される。

そうしなければ（防護下飼育法に変更しなければ）、その危険なゾウは、ある動物園から次の動物園へと、たらい回しにされ、その都度、さらに悪い評判がついてまわり、最終的には凶暴という理由で殺されてしまう。

ゾウたちは、かつて、どのようにして殺されていたか？

ゾウの死刑執行（処刑）は、ついひと昔前まで、センセーショナルなイベントであり、殺処分は、公衆の面前で行われていた。

しかし、ゾウの殺処分が、容易ではないことを、過去の例が示している。ゾウの殺処分



↑ Zambi

の方法は、毒殺（めったに成功しなかった）、絞殺、絞首刑、電流による死刑執行、大砲による砲撃（スイスのムルテンで 1866 年に砲撃が行われた）、ライフルなどによる一斉射撃（100 発、あるいはそれ以上の発砲すら珍しくない）、機関銃による射撃、突き刺して死ぬまでの暴行、などさまざまだった（「Elephants in the Circus サーカスのゾウ：A.Haufellner 著」から引用）。



ゾウは、現在も依然として処刑されているか？

今日、近代の動物園やサーカスでは、もはや、ゾウは公然と処刑されることはないし、ゾウを殺した後に、その肉がレストランで売られることもない。

動物園やサーカスの動物の死は、観客のいない裏側で起きるものである。

多くの場合、動物の殺処分は、秘密にされ事故死として公表される。危険で悪意のある（凶暴な）ゾウは、突然、「歯痛」や「潰瘍」になり、治療は麻酔下で行うしかなく、二度と目覚めることはない（病気という名目で、致死量の麻酔薬を投与される）。

現在、ゾウは、どのようにして殺されているか？

ゾウは、「人間」式に、「イモビロン」や「塩酸エトルフィン（M99）」といった麻酔薬を使って家畜のように安楽死させられる。

多くの動物園動物、特にゾウは、人気があって好かれているので、彼らの死は、ただ後になって報道されるだけである。死の情報公開を遅らせることは、関係するゾウの飼育係たちと他の責任者の悲痛な決心に対して、「専門家」と「動物愛好家」が、口出しする（干渉する）ことを防ぐためである。

訳者注：日本においては、太平洋戦争の中～末期を除いて、これまで、健康なゾウが殺さ

れたことは決してない。さらには、不治の病になったり、寝たきりになったりしたゾウですら、安楽死されたことはない。